

Die Sportler von ehemaligen Ost Deutschland erzählen über den Sport von Deutsche Demokratische Republik. : Autobiografische Literatur von 1990 bis 1998 sind hauptsächlich analysiert.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/18643

旧東ドイツスポーツ関係者が語る東ドイツスポーツ

— 自叙伝的著作 (1990—1998年) の分析を中心に —

齋學 淳郎 (水産大学校)

Die Sportler von ehemaligen Ost Deutschland erzählen über den Sport von Deutsche Demokratische Republik.
— Autobiografische Literatur von 1990 bis 1998 sind hauptsächlich analysiert. —

Atsurou HOUGAKU (National Fisheries University)

I. 本稿の意図

ドイツ連邦共和国 (以下、1990年以前は西ドイツ、以後はドイツと表記) では1990年のドイツ統合後、「ドイツ民主共和国 (以下、東ドイツと表記) のスポーツとは何であったのか?」「東ドイツスポーツを近代ドイツスポーツ史にどのように位置づけるのか?」ということを明確にするために、東ドイツスポーツ史の再構成が企図されてきた。東ドイツ時代に書かれた教条主義的なスポーツ史叙述に対する懐疑があったからである¹⁾。間もなく資料集も出版されたが²⁾、史料的な限界のため、ソビエト統治期及び東ドイツにおけるスポーツの包括的あるいは詳細な像は提示されないでいた³⁾。

1990年代後半になってようやく、ポツダム大学等を中心として進められた東ドイツスポーツ史に関する研究がまとまった成果として出された。その成果の一つが「ドイツにおけるスポーツの発展シリーズ」全4巻である。その中の一つ旧西ドイツの Spitzer らによって編纂された『東ドイツスポーツの鍵となる文書: オリジナルな史料によるスポーツ史的概観』(1998年) は、その名の通りオリジナルな史料を用い、東ドイツスポーツの発展を転換期を中心に跡づけ、その輪郭を明確にす

るものであった⁴⁾。同著では、ソビエト占領権力、後には東ドイツのスポーツ独占者による伝統的なフェラインの禁止とスポーツ諸組織の政治的支配、党によるスポーツ支配を確実にしたメカニズム、シュタージ⁵⁾、ドーピング、内密の競技スポーツの助成、ディナモや軍隊スポーツなどの分派、サッカーの偏重など、主に東ドイツスポーツのネガティブな側面に焦点があてられている。

その後、東ドイツスポーツ史を新しく如何なる形で叙述しようとするかに関する論議が1999年に「スポーツの社会・現代史」誌に掲載された Buss らの論文を巡って生じた。この論議の推移については、船井によって著されているのでここでは省略するが⁶⁾、この論議の焦点の一つは、東ドイツスポーツ史再構成への東ドイツスポーツ関係者の関与をどこまで認めるかであろう。このことは現代史研究における悩ましい問題であるが、今後の研究の方向性を見極めるためにも、我々は東ドイツスポーツ関係者の考えや主張を蔑ろにせず、また知る必要があると思われる。

このような動向を意識しつつ、本稿は、ドイツ統合から1998年までに旧東ドイツスポーツ関係者によって出された5冊の自叙伝的著作 (Seifert, Fuchs/Ullrich, Ewald, Oertel, Seyfert)^{7)~11)} の分析を通じ、著者達が東ドイツスポーツ及びその

周辺について語ろうとしたものを検討するものである。ここで自伝ではなく自叙伝的著作と用語を用いているのは、後述するように、これらには、「自ら書いた自分の伝記。自叙伝」(広辞苑：伝記)以外のものも含まれているからである¹²⁾。これらの著作について、Beckerは、「1990年に自叙伝的著作の出版が始まった(例えば、Seifert 1990、Fuchs/Ulrich 1990)。このような傾向は現在止まっている(最後に Oertel 1997、Seyfert 1998)。旧東ドイツのスポーツマン、トレーナー、幹部、ジャーナリストが東ドイツスポーツ発展に関するその個人的見解を詳述したことは歓迎すべきことであり、それらは、時代の証言者へのインタビューとともに、清らかな公文書研究に対し、方法論上避けがたい修正を示した¹³⁾と述べる一方で、風当たりの強い当事者に対するインタビューを纏めた出版物(Ewald 1994)については、主観的な証言もみられることを指摘している。Bekerの述べるように、国家崩壊後批判に晒された当事者による著作の取り扱いには注意を要するが、東ドイツ時代には語られることのなかった言説は、今後東ドイツスポーツ史を考えるうえで示唆を与えるものであろう。このような自叙伝的著作の分析は様々な側面から可能と思われるが¹⁴⁾、わが国では唐木によってこれらの著作のうち1冊が部分的に用いられているのみと思われるので¹⁵⁾、本稿ではまず、5冊の著作において旧東ドイツスポーツ関係者が東ドイツスポーツ及びその周辺の何について多く論じているのか、それをどのように論じているのかを明らかにし、先行研究や同時期の研究との比較のうえで、その特徴について若干言及したい。

II. 各著作の著者と概要

ここでは研究対象となるそれぞれの著作の著者と概要について、簡単に述べておきたい。

1. 「東ドイツスポーツの名声と不幸。総括でないスポーツジャーナリスト40年のメモ」

東ドイツの建国(1949年)後間もなくからの記

者であったと考えられる著者 Seifert によると、東ドイツには2種類のスポーツジャーナリストがいたとされる。長年国内を旅した普通の者と、指導部と密接な関係があり、そのためにその行動において他よりも自由行動のあったごく少数の者である。自身を前者と位置づける彼は、東ドイツスポーツがどのように名声を得て行き、どのように不幸になって行ったのかを述べている。彼は政府やスポーツ幹部のスポーツ指導などを批判する一方で、従来あまり語られることのなかった東ドイツ国内の地方におけるスポーツの諸相や変容、衰微していったスポーツ種目、有名でない選手やトレーナーの活動などについても、自らの体験をもとに述べている。

2. 「月桂樹と喪章—スポーツの驚き東ドイツの興隆と“没落”」

著者の一人 Fuchs は1946年生まれ、オリンピック女子槍投げで二度金メダルを獲得した選手であった。彼女より19歳年上のもう一人の著者 Ullrich はドイツ社会主義統一党(以下、SEDと表記)の機関紙“Neues Deutschland”紙のスポーツチーフであった。この元一流選手と政府に近いジャーナリストは、世界を驚かした東ドイツスポーツが1989年秋に不評を被り、急速に崩れたことについて体験をもとに幾晩も論議した。同著はその対話を纏めたものであり、東ドイツにおけるスポーツの位置、アマチュアスポーツとプロスポーツ、ドーピング、児童・青少年の助成、高度な成績のためのトレーニング、大衆スポーツ、SEDのスポーツへの干渉などがテーマとされている。

3. 「私がスポーツであった：勝者が次々に生まれたおとぎの国の真実と伝説」

1926年生まれの著者 Ewald は、早くも1948年のドイツスポーツ委員会(以下、DSと表記)の設立にかかわり、1952年に国家身体文化・スポーツ委員会長官、1961年にドイツウルネン・スポーツ連合(以下、DTSBと表記)会長となり、崩壊寸前まで同国のスポーツを指導した中心人物で

ある。同著にはこの著名な Ewald に対するインタビューの内容がおさめられている。聞き手の Andert は、次のような認識を持ってこのインタビューを行った。「スポーツの驚き東ドイツ」を特徴づけたもの、それはあるやり方であった。その最も重要なことは一人の男によって発見され、約40年間徹底して実施された。即ち、Ewald によってである。彼はスポーツにおける Ulbricht¹⁶⁾ であり、Honecker¹⁷⁾ であった。

4. 「最高の時. 回想録」

1927年生まれの著者 Oertel は、1949年からラジオ東ドイツ、1955年からテレビ東ドイツに務め、レポーターでも有名なジャーナリストである。彼は同著において、後の公平なドイツ史の修史のために、そのジャーナリスト生活を書くと言っている。同著の前半は彼がジャーナリストになるまでの経歴であり、後半は彼のジャーナリスト生活である。後半では彼が携わった国内外でのルポ、メディアの変容などが述べられるが、その中で東ドイツスポーツについても、オリンピック、偉大な選手、スポーツにおける東西対立の激化、東ドイツの競技スポーツ、ドーピングなど様々なことが体験的に語られている。

5. 「その時、なお何かを為さねばならない。規定演技と自由演技以上の私の人生」

1948年生まれの著者 Seyfert は4才からアイススケートを始め、2度ワールドカップで優勝した一流選手である（1968年のオリンピックは2位）。同著は彼女の自叙伝であるが、子供の頃から世界チャンピオンになるまでの競技者としての道程のみが述べられているのではなく、引退後の一女性としての生活、即ち、トレーナーの仕事、語学研究、一般企業での仕事、アイスショーの仕事、私生活（恋愛、結婚、子育て）などについても述べられている。

Ⅲ. 東ドイツスポーツ及びその周辺に関する叙述

上述のように、各著作の形態や著者達の東ドイツ時代の職や地位は異なり、また、主にスポーツそのものを扱うもの、主にジャーナリズムを扱うものというように各著作の内容も異なるが、ここでは、東ドイツスポーツ及びその周辺について、これらの著作で多く述べられていることを項目別に整理し、検討したい。

1. 競技スポーツ

1) 競技スポーツにおける画期

世界で注目を集めた東ドイツの競技スポーツについて、Seifert は、競技スポーツの大きな流れを、世界クラスへの上昇の始まり（1960年代初めから）、世界クラスへの飛躍（1960年代半ばから）、絶頂期（1970年から1980年）、下降の徴候（1980年代）と区分し、オリンピックメキシコ大会（1968年）以後は、党中央委員会政治局において競技スポーツの目標設定がなされたとしている。この区分にかかわる Seifert の叙述では、1960年代初めまでは、選手、トレーナー、メディアは国際舞台へ出るのは困難であったが、東ドイツスポーツの勝利のみを目指し一丸となった時期であったという叙述や¹⁸⁾、1988年のオリンピックソウル大会において東ドイツ選手がなお素晴らしい成果を収めていたにもかかわらず、1980年代には東ドイツにおいて若者のスポーツ離れがあったとする内側の視線による叙述が示唆的である¹⁹⁾。一方、Ewald は、競技スポーツが目的に適うように促進され始めたのは1961年以後としている²⁰⁾。また、Oertel はオリンピックモントリオール大会（1976年）における成果がスポーツ幹部や政治家をさらに競技スポーツの成果に食欲にさせたと言っている²¹⁾。

2) 競技スポーツ促進の理由

競技スポーツ促進の理由について、Ewald は、1950年代にすでに競技力が高かった西ドイツに対し東ドイツの競技力が低かったこと、国際大会参

加に際して西側の妨害があったことなどから、成果が必要であったと述べている²³⁾。冷戦下におけるこのような妨害については他の著作でも述べられており、他日明らかにしなければならないであろう。

3) 競技力の上昇をもたらしたものと阻害したもの

東ドイツ旋風と言われた急激な東ドイツの競技力向上の理由について、これらの著作では従来から言われているように後継者養成制度などが述べられているが、Ewaldはより詳しく、新しいスポーツシステムの構築、国家の援助、促進種目の限定、スポーツ指導者の質と数、ボランティアの協力、スポーツの社会的高さ、法的拘束力のある法令、企業からの出資、ソビエトとのスポーツ交流、指導部の協力体制、競技スポーツにおける可能性と限界に関する情報のタイムリーな獲得、長期的な計画の立案、重点種目でのタレントの発掘、トレーニングセンター、児童・青少年スポーツ学校、児童・青少年スパルタキアードなどの選抜制度、各県スポーツクラブへの促進スポーツ種目の分散、キーンバウム²⁴⁾などの施設、スポーツ科学、高地トレーニングなどのトレーニング法の早い時期からの実践などを挙げている。その他のEwaldの叙述では、ドイツスポーツの伝統・経験を考慮し、ソビエトスポーツシステムの模倣は他の社会主義諸国家より少なかったという叙述が東ドイツスポーツシステムの独自性を窺わせ、特に注目される²⁴⁾。これに対し、Seifertは、実際に頑張ったのは選手やトレーナーであったとも述べている²⁵⁾。他方、競技力の上昇を阻害したものとしてこれらの著作で述べられているのが、東ドイツの財政的問題や外貨不足である。また後述するように、党によるスポーツへの干渉なども競技スポーツの発展に影響を及ぼしたとされている。

4) 競技スポーツの問題

このような競技力上昇の一方で、これらの著作において問題視されているのが、成果、記録主義への傾斜である。Fuchsは、スポーツクラブにおいても次第に成果のみが重視され、それまであったみんなで楽しめるプログラムがなくなっていっ

たことなどを体験的に述べ²⁶⁾、Seifertは、メダルを獲得しやすい種目へ促進種目(スポーツIと分類)が限定され、それ以外の種目(スポーツIIと分類)が衰微していったことや、成果、記録主義が若者のスポーツ離れを生じさせていったことを述べている²⁷⁾。また、これらの著作は、競技スポーツの助成の是非はともかく、それが秘密裏に進められたことを問題視している。

5) 実際のトレーニング・大会の様子や雰囲気

選手であったFuchsやSeifert、ジャーナリストであったSeifertやOertelは、国内外における選手やチームの実際のトレーニングや試合、統一ドイツチームの様子や雰囲気などを生々しく叙述している。それらからは、実際にかかわった者しか知り得ない選手らの地道な取り組みや心情などが窺え、示唆的である。またSeifertは、引退後のドイツ体育大学での研究やトレーナーの仕事などについても体験的に述べている²⁸⁾。

2. 大衆スポーツ

1) 指導部の大衆スポーツの軽視

競技スポーツに対し従来から遅れが指摘されていた大衆スポーツについて、Seifertは、東ドイツにおけるその軽視を次のように厳しく批判している。党や国家指導部の大衆スポーツに関する声明などは、実際のものと明らかに隔たりがあり²⁹⁾、大衆スポーツ促進のための資金も、促進構想もなかった。スポーツ章³⁰⁾は魅力がなく、そこでは新しいスポーツ種目の導入もなかった。大衆スポーツ分野で、東ドイツにおいて新しいものを何も発見することはできない。またUllrichも、指導部の怠慢を次のように批判している。初期にはあったかもしれないが、Ewaldは大衆スポーツを顧みなかった。地方ではDTSBの大衆スポーツの責任者は何もしなかったが、貴賓席に来る訪問者を怒らせないために何をすべきかは知っていた。彼らは成果の報告はしたが、役に立たなかった³¹⁾。また、Seifertは市民に旅行の不自由さがあったことについても述べている³²⁾。

2) 大衆スポーツを支えたもの

このような状況下で、大衆スポーツを支えたものについては従来あまり明らかにされていないが、Ullrich は次のように述べている。自転車周回レースでは、DTSB 及び自転車連盟指導部は熱心でなく、主にメディアがそれを組織した。大衆スポーツ活動に従事したのはボランティアであり、企業からは出資があった。スポーツ II に区分された種目関係者がやる気を失わず、大衆スポーツの組織化を援助したこともあり、彼らは自らの余暇を犠牲にそれらに尽力した³⁵⁾。

3) スパルタキアードの別の側面－地方の伝統的行事

1966年から始まったスパルタキアードが、若者の最初のリハーサルとして、厳しいテストとして重要な役割を果たしたことは周知のことであるが、Seifert は、地方都市ではそれが総合的競技会という性格を有していたが故に、地方の伝統的行事として機能していったところもあった(シニアのプログラムもあった)、と従来にない別の側面を述べている。Seifert はそれを Jahn の「トゥルネンの痕跡」³⁶⁾と著している。このような行事も、少数のスポーツ幹部の考えによって、記録の水準を引き上げるためのプログラムに変更され、沢山の参加者数、すべてのスポーツ種目ということよりも記録が重視されていったとされるが、このような叙述からは、ドイツスポーツの伝統とともに、SED の政策的意図と民衆のスポーツに対する意識の差異も感じられる。

4) 大衆スポーツ軽視に対する Ewald の反論

大衆スポーツ軽視という批判に対し、Ewald は次のように反論している。経済的理由ですべての種目という訳にはいかなかったが、大衆スポーツの促進が蔑ろにされた訳ではなかった。1988年においても、大衆スポーツと競技スポーツの予算配分は6:4であり、大衆スポーツも世界水準であった³⁵⁾。

3. 党のスポーツへの干渉とスポーツ組織の問題

1) 党のスポーツへの干渉

東ドイツは事実上、一党の独裁体制にあった。

これらの著作は、党及びその指導部が早い時期からスポーツに強く関与していたことを指摘している。Ewald は、Ulbricht や後に SED 第一書記となる Honecker がスポーツにかかわっていたことを体験的に例えば次のように述べている。スポーツ独自の組織形態が必要となったが、自由ドイツ青年同盟指導部、特に Honecker に拒絶された。Ulbricht に直接あったとき、ソビエトスポーツの資料を渡された³⁶⁾。このような党指導部による直接の関与に関する叙述は従来になく注目される。また、これらの著作において、党によるスポーツの干渉に関して批判されているのは、党によるスポーツの独占、スポーツの手段の利用や統制、報道への干渉、サッカーの極端な優遇、実際の試合結果までの指示、促進スポーツの区分、スポーツ役員人事への介入、シュタージュによるスポーツの監視、競技スポーツに関する財源や報酬等の秘密主義などである。

2) スポーツ組織のヒエラルヒー

Seifert は、1961年から1989年までの長きに渡って DTSB 会長の職にあり、党指導部とも結びついていた Ewald に対し次のように厳しい批判を行っている。彼の権限は絶対的であり、気に入らない者は排除された。彼のつくったスポーツにおけるヒエラルヒーは、社会主義社会のつくった墮落したものであった。さらに、Seifert は、1989年秋に DTSB 新会長になった Eichler は若干の変革を試みようとしたが、指導部はすでに機能せず、変革のチャンスは殆どなかったと³⁷⁾、その硬直化を指摘している。

3) 大衆団体 DTSB の問題

DTSB が大衆スポーツの助成に熱心でなかったことは上述したが、Ullrich は、党の方針に沿うように DTSB が次第にトップ選手のトレーニングを分析するためだけのものとなり、実践では新しい知見に基づいて東ドイツスポーツを先に進めようとする実験が行われたことや、DTSB 幹部会での演説者や内容などはずっと前から決められていたことを経験的に述べ³⁸⁾、DTSB の競技主義への傾斜、自立性のなさ、幹部会の形骸化を指

摘している。

4. ソビエトの影響と関係

1) 占領権力とスポーツの政治化

第二次世界大戦後、ドイツを四つに分割占領したアメリカ、イギリス、フランス、ソビエト連合国の最高決定機関は、常設の四ヶ国相会議であり、その下には連合国管理理事会が、さらにその下には各占領地区の軍政があった。ソビエト占領地区での占領行政、経済、社会の発展は、他の西側3地区のそれとは著しく異なっていた。Ullrichはソビエト軍政部に社会主義的な身体文化のための専門家が配置されたと述べ³⁹⁾、Ewaldは占領権力はスポーツを政治的にコントロールしなければならないとしていたと述べるなど⁴⁰⁾、占領下におけるソビエトの影響とスポーツの政治化の始まりが示唆されているが、戦後直後におけるソビエトの影響については詳しく述べられていない。

2) ソビエトによるスポーツの援助と意図

これらの著作は、1950年代を中心に、ソビエトが東ドイツに対し新しいトレーニングや知識の導入などスポーツの実質的な援助を行っていたことを述べている。Seifertは、友好的な援助は、東ドイツスポーツの競技成績に貢献し、建設中の社会主義国家の印象を助け、それを国内的国際的に強化するものであったと想定されると述べつつも、そのような援助は、1950年代初めの米ソを基軸とする国際状況の中で、社会主義の拡大を図ろうとするソビエトのためでもあったことを指摘している⁴¹⁾。

3) 模倣と相異

Ewaldは、1950年代に競技スポーツや大衆スポーツ行事に関してソビエトから学んだことや⁴²⁾、スポーツ交流でソビエトへ行くことは比較的容易であったことなどを述べている。また、Ewaldは、国家保安省のスポーツへの関与はそれが国家において指導的役割を果たそうとするもので、ソビエトに倣ったものと述べているが、スポーツ幹部によるこのような叙述は、従来になく注目される⁴³⁾。ただ、上述したように、Ewaldはソビエト

スポーツシステムの模倣は他の社会主義諸国家より少なかったと、ソビエトとの相異、東ドイツスポーツシステムの独自性についても述べている。その他、Seifertは、東ドイツの競技成績の上昇によって、両国のスポーツ関係は友好からライバルへ変化したことや、東ドイツの競技スポーツにおける有効な手段は他の社会主義諸国家にも秘密にされたことも述べている⁴⁴⁾。

5. スポーツと外交

1) 両ドイツ間のスポーツ交流

東西ドイツは1949年にそれぞれ社会体制の異なる国家として独立したが、スポーツ分野では1960年代初頭まで相互に頻繁な交流があった。この両ドイツ間のスポーツ交流について、Ewaldは、政治的重要性があったので、考えをSEDに提出し、同意を得ることが必要であったことや、中央レベルでの交流を西ドイツは望んでなかったが、ソビエトの求めでそれをしなければならなかったことなどを述べている⁴⁵⁾。この交流でのソビエトの主導性については従来明らかにされておらず、注目すべき指摘といえよう。

2) 国家的承認を求めて

これらの著作でも述べられているように、東ドイツは国家的承認が拡大するまで、スポーツ界においても承認されず、西側から多くの妨害を受け、それが東ドイツ国民を悲しませた。したがって、国家的承認を取り付けることは重要な課題であった。Ewaldは、東ドイツの国際的なスポーツ活動が東ドイツの外交と結びついていたことや、IOCによる承認が大きな意味を持ったことを述べている⁴⁶⁾。

3) 強国への政治的依存

冷戦下では両陣営は米ソの2大強国の影響を受けざるを得ず、オリンピックモスクワ大会(1980年)とロサンゼルス大会(1984年)では、多くの国々のボイコットという事態を招いた。Ewaldは、2つのボイコットは強国の仕業以外の何ものでもなく、東ドイツはソビエトに依存するしかなかったと述べている⁴⁷⁾。一方、一流選手であった

Seyfert は、スポーツの政治的利用やボイコットは選手には何の意味もなさないと言っている⁴⁸⁾。

6. ドーピング

1) ドーピングの経緯と展開

国家崩壊前からセンセーショナルに報じられていたドーピングについて、Seifert は、その経緯を次のように述べている。東ドイツにおいてスポーツマンの負傷が頻繁にあった時代があった。東ドイツはスポーツ医学の基盤づくりに取り組み、スポーツ医学の中央相談所をつくった(1956年)。それは高水準スポーツと平行して発展し、初めのうちはとりわけそれを指向したものではなかったが、オリンピックミュンヘン大会(1972年)前の負傷者の増加に対して、独自のスポーツ医学局を拡大しなければならなくなった。専門家の養成が始まり、それがドーピングの濫用につながった。ドーピングはタブーであった。上から、即ち、DTSB 会長、党書記、国家次官によるスポーツ医学の方向づけが疑いなく進められた。1970年代には優れた知識を持っており、1980年代からメダルの可能性が高い種目で濫用の時代に入った。ただ、各国においてもドーピングはなされていた⁴⁹⁾。Oertel も、東ドイツではそれが真面目に組織的に取り組まれていたことなどを述べている⁵⁰⁾。

2) ドーピング批判への反論

ドーピング批判には、反論も多く見られる。Seyfert は東ドイツスポーツをドーピングとして片づけるのは一面的すぎる、世界中の競技場で東西の争いがあったと述べている⁵¹⁾。Fuchs は自らの体験から、東ドイツのスポーツ選手全員がドーピングをしていた訳ではないと反論している⁵²⁾。Ewald は自身や指導部の指示によるドーピングを否定したうえで、西ドイツの方が沢山していたことなどを述べ、反ドーピングの国際システムのないことがドーピングの問題であり、これには冷戦の影響もあったとしている⁵³⁾。

7. シュタージとスポーツ

1) スポーツ監視の実態

秘密警察である国家保安省(シュタージ)によるスポーツの監視は、国家崩壊後、ドーピングとともにセンセーショナルに報じられた。Fuchs は、選手が国外に出たとき、どのようなコンタクトがあったのかを帰国後すぐ報告しなければならなかったことは周知のことであったとその様子を述べ⁵⁴⁾、Seyfert は国内でトレーナーの仕事をしている際に外国人との接触を選手時代以上に厳しく批判されたと自身の経験を述べている⁵⁵⁾。また、Seifert は、スポーツメディアの中にもシュタージの協力員がいたことを述べている⁵⁶⁾。

2) 秘密裏の監視の徹底

このような監視は秘密裏に徹底して行われた。スポーツ界のトップにいた Ewald でさえそれを十分には知らず、次のように述べている。国家保安省によるスポーツへの監視がそれほどは知らず、党幹部のスポーツ関係の政治局員が同時に国家保安省も管轄していることなどは壁崩壊後初めて知った。様々なレベルで、国家保安省諸機関の企てが存在していた⁵⁷⁾。ただ、他の旧東欧社会主義国家においてもスポーツが秘密警察によって強く監視されていたことが、近年明らかにされてきている⁵⁸⁾。

8. サッカーの偏重と低迷

1) サッカーの人気と低迷

東ドイツは世界の3大スポーツ強国の一つであった。しかし、国民に最も人気のあったサッカーは、他の種目と比較すると、それ程の結果は残せなかった。Ewald は、多額の報酬を与えるなど極端にサッカーを優遇し過ぎたことや、サッカーがDTSB やサッカー連盟によって指導されず、スポーツ以外の人々、即ち、中央や地方の政治及び経済指導者によって指導されたことなどをその低迷の理由として挙げている⁵⁹⁾。

2) ダイナモの強さと問題

ドイツ全体で見れば、サッカーチームとしてはダイナモ(秘密警察系スポーツクラブ)だけが若

干強かったが、Ullrich はダイナモではチームからだけではなく、国家保安省の国庫からもお金がだされたのではと疑惑を述べている⁶⁰。また、ダイナモを統括した Mielke (国家保安相) のスポーツへの個人的な影響力や問題もこれらの著作で述べられている。サッカーにかかわるこれらの見解は、先行研究や同じ時期に編纂された先の『東ドイツスポーツの鍵となる文書：オリジナルな史料によるスポーツ史的概観』にも見られるものである。

9. ステートアマとプロ

1) 国家的に援助されるアマチュア

ステートアマと称された東ドイツのスポーツについて、Ewald は、我々はステートアマでも、カムフラージュされたプロでもなく、国家的に援助されるアマチュアであったとし、国家的に助成されるアマチュアと他との相異を学校教育、職業教育を施すなど競技選手の将来を考えていたことと述べている。ただ、上述のサッカーはその例外であったことを Ewald も認めている⁶¹。

2) 報酬システムの形成とプロに対する認識の違い

Ewald は、努力のいる競技スポーツの成果に対して報いることは当然と述べている⁶²。Fuchs もそれを否定しないが、報酬を秘密にしたことを問題視している。Fuchs 自身は1967年の好成績によって初めて報酬を渡されたとき戸惑ったと述べている⁶³。このことはそれ以前から報酬システムがあったことを窺わせるが、何時からそれがあったのかは確認されない。また、Fuchs は1973年の陸上代表チームは素晴らしいチームワークを有していたが、1988年になると選手の主な関心は報酬に移ったと、その変化を述べている⁶⁴。Seyfert は1970年の競技生活引退後にプロとしてのアイスショー出場を望み、そのお金を東ドイツスポーツのために利用しようと考えたが認められなかった自らの経緯についても述べている⁶⁵。東ドイツで最初に容認されたプロは Witt であり、1988年のことであった。一方、ジャーナリスト達

は一様にプロを否定し、例えば Seifert は次のように述べている。私はプロスポーツを基本的に愛することも、尊敬することもできない。それはスポーツ元来のものと異なるものを付着させた。アンフェア、欲望、欺瞞、高い生命危機である。そして、すべてはお金であった。東ドイツにおいても、成果に対する報酬システムがつくられていくなかで、選手同士の友人関係はなくなっていった⁶⁶。このように当時の職や地位によって、報酬やプロに対する認識が異なることは注目されよう。

10. メディアとスポーツ

1) スポーツジャーナリストの区分

東ドイツのメディアとスポーツについて、従来我々はあまり知ることはなかったが、これらの著作では多くのことが語られている。先に述べたように、Seifert は東ドイツのスポーツジャーナリストを普通の者と少数の者と区分しているが、指導部と密接な関係があり、そのためにその行動において他よりも自由行動のあった少数の者として、Ullrich と Oertel の名を挙げている⁶⁷。

2) メディアによるスポーツの支援と自戒

Ullrich によると、ソビエト占領地区での最初の選挙 (1946年10月) に際して、サッカー試合が Neues Deutschland 紙の主催で行われた⁶⁸。以後、メディアが主に大衆スポーツ行事を支援していた様子がこれらの著作から窺える。Oertel は、児童・青少年スポーツ、女性スポーツなどに焦点をあてたラジオでのスポーツ番組などにも触れている⁶⁹。一方で、ジャーナリスト達は、競技スポーツの成果や記録を賛美し、それを東ドイツの勝利とする報道を行ったことを認め、自戒している。

3) 自由のないジャーナリズム

他の社会主義国家と同様、秘密主義という覆いのもと、ジャーナリストは抑圧され、能力を発揮できる機会が制限されていたとジャーナリスト達は述べている。Seyfert は、自身の経験から、国外での大会の様子がすべて伝えられた訳ではなかったと述べている⁷⁰。

11. 国家崩壊とスポーツ

1) 指導者への批判

オリンピックソウル大会においても優れた成績をおさめた東ドイツが、翌1989年に崩壊し始めた。Seifert は国家の崩壊とスポーツに関連して次のように述べている。東ドイツスポーツに不幸がもたらされたことは、革命の年に明らかとなった。オリンピック精神による健全化が謳われたが、あったのは東ドイツ製の過度のアマチュア精神のみであった。東ドイツスポーツの名声と不幸にはその生みの親達がいた。これらの生みの親達はその政治グループの頂点にいて、その理念により、人々が元来考えていたものと反対のものをつくった⁷¹⁾。そして、彼は Honecker, Mielke, Ewald などの指導者の責任を指摘し、変革によって、スポーツが中央から統制されなくなり、再び自由になったことは喜ばしいと述べている⁷²⁾。Ullrich も、我々は間違った社会主義によって失敗した、失敗させた多くの者がいると述べている⁷³⁾。Oertel は次のように述べている。小国にとってオリンピックでは7～9位が立派で皆に敬いを得るものであったのかもしれない。しかし、スポーツ幹部や政治家は満足せず、慎重な注意や警告を聞き流した⁷⁴⁾。

2) 冷戦とドイツ分裂の影響

その一方で、Seifert は、Adenauer (西ドイツ首相) と彼によって提唱されたハルシュタイン・ドクトリンが東ドイツスポーツの誉れ高き上昇の父親というテーゼにも注目したいと述べ、冷戦下における西側の動きも東ドイツにおける過度な競技スポーツ助成の要因にあげている⁷⁵⁾。ハルシュタイン・ドクトリンは、西ドイツがドイツ地域で唯一ドイツ人を代表する正統性を持つ国家であると位置づけ、ソビエト以外で東ドイツを国家承認した国家とは国交を断絶するとし、東ドイツを孤立させること目的としていた。Ullrich もまた、ボン基本法第23条のスポーツへの影響を例に、同様のことを述べている⁷⁶⁾。

3) 東ドイツスポーツに対する全般的批判への反論

東ドイツ崩壊後、そのスポーツは全般的に厳し

い批判に晒された。このような批判には多くの反論が見られる。Ullrich は東ドイツ史の前半、その時々に行われたプロセスすべてが誤りであったことは断じてないとし、DS などの設立には、後に西側へ移った者も含め多くの賛同があり、反ファシズムへの道が期待されたと述べている⁷⁷⁾。同様に Oertel は次のように述べている。多くのことをぐらつかせた大変革でさえ、自転車の名選手 Schur の偉業を揺るがすことはできない。1960年代がピークの平和自転車競走⁷⁸⁾の始まりは当時の平和を求めた状況にあった。開催する国家や政党が政治資金をつくろうとしたことは明白であったが、このレースが気の狂った戦争の残骸の上に生じ、ドイツ人を解放したことは覆すことはできない⁷⁹⁾。また Oertel は原則的に良いこと、世界的評価の高いことを歴史の薪山の中に捨てることは理解できず、場合によっては許すことができないと述べている⁸⁰⁾。Fuchs は、東ドイツの競技スポーツの良いところは残すべきと述べ⁸¹⁾、Ewald は、ドイツが東ドイツスポーツを殆ど引き継いでいない理由について、何を引き継ぐかを考える際には、そもそも東西両ドイツスポーツを比較しなければならないからと皮肉っぽく述べている⁸²⁾。

IV. 結びに代えて

ここでは、分析を通じ明らかになった語られた内容を纏めつつ、その特徴について若干言及しておきたい。

これらの著作の中で、東ドイツスポーツに関連して多く述べられていることは、上述のように、競技スポーツ、大衆スポーツ、党のスポーツへの干渉、自立性のないスポーツ組織、ソビエトの影響、スポーツと外交、ドーピング、シュタージ、サッカーの偏重、ステートアマ、メディアとスポーツ、国家崩壊とスポーツなどに関することであった。同じ頃に旧西ドイツの Spitzer らによって編纂された『東ドイツスポーツの鍵となる文書：オリジナルな資料によるスポーツ史的概観』と比較すると類似は多いが、これらの著作における大衆

スポーツやスポーツとメディアに関する叙述の多さが相異である。

冷戦時代を生きた著者達による東ドイツの社会やスポーツに関する個人的見解は、東ドイツ時代には語られることのなかったものが多く、貴重と言える。実際のトレーニングや試合の雰囲気、政府関係者に近い者でしか知り得ない事柄、地方でのスポーツ状況などは、公文書などでは知り得ないからである。ただ、その叙述には、著者達の東ドイツ時代の職や地位も反映され、類似、相異がみられる。例えば、国家崩壊後最も批判される立場にあり、Seifert などからも批判される Ewald の著作では、ドーピングへの関与や大衆スポーツの軽視が否定されるなど、他とは相異が大きく、その叙述を鵜呑みにすることはできない。このことは自叙伝的著作を研究する際の難しさと思われる。しかし、Ewald の指摘通りに、西ドイツにおけるドーピングの実態が次第に明らかになってきたことからわかるように⁸⁹⁾、我々は Ewald の言説も蔑ろにできないであろう。

また、Spitzer らの著作と同様、これらの著作においても、東ドイツスポーツのネガティブな側面についても多くのことが語られている。党によるスポーツの独占、指導者の誤った方針や指導、スポーツの手段的利用や統制、報道への干渉、サッカーの極端な優遇、スポーツ役員人事への介入、スポーツ組織のヒエラルヒー、大衆団体 DTSC の自立性のなさ、ドーピング、シュタージュ、メダルを取りやすい種目への促進種目の限定、成果・記録主義への傾斜、秘密裏の競技スポーツの助成、大衆スポーツの軽視などである。しかしその一方で、これらの著作では、東ドイツスポーツに対するネガティブな側面の強調、一面的理解、全般的批判に対して反論もみられることを見逃してはならない。とりわけ、反ファシズム・民主主義を志向した戦後スポーツ改革の正当性に関する主張などは、旧東ドイツのスポーツ史家によっても東ドイツ時代からなされ、統合後もなされているものであり⁹⁰⁾、我々はその主張を慎重に取り扱わねばならないように思われる。東ドイツスポーツを近

代ドイツスポーツ史にどのように位置づけるのかという問題の根本にかかわるからである。

上述のこととも関連するが、東ドイツのスポーツシステムの独自性に関する叙述もみられる。ナチスドイツの崩壊後、社会主義が志向されたソビエト占領地区及び東ドイツでは、ドイツに伝統的な地域的性格の強いフェラインが禁止されるとともに、スポーツ組織の再編が1957年の DTSC 設立まで繰り返されたが、ドイツスポーツの伝統・経験を考慮し、ソビエトのスポーツシステムの模倣は他の社会主義諸国家より少なかったとする Ewald の叙述は、ソビエトのスポーツシステムの模倣が部分的に東ドイツにはそぐわなかったことを裏付けるものである。また、選手選抜制度として名高いスパルタキアードが、地方都市ではみんなが参加できる伝統的行事として機能していったところもあったという従来にはない叙述もみられる。Seifert はそれをトゥルネンの父である Jahn の痕跡と表現しているが、このような叙述からは、ドイツスポーツの伝統とともに、SED の政策的意図と民衆のスポーツに対する意識の差異も感じられる。これらのことも今後東ドイツスポーツ史研究を進めるうえで重要な視点となろう。

以上のように、これらの自叙伝的著作は、社会主義国家であった東ドイツの社会やスポーツを理解するための様々な手懸かりを我々に与えてくれるものといえる。東ドイツスポーツ史の再構成に際して、東ドイツスポーツ関係者の関与をどこまで認めるかという論議は今後も続くと思われるが、東ドイツが消滅し、しばらく時を経たいま、社会主義の模範といわれ、スポーツ分野でも世界の注目を集めた「東ドイツのスポーツとは何であったのか」という問題をネガティブな側面だけに偏らず冷静に分析できるチャンスが生み出されているように思われる。社会主義革命がスポーツにもたらした遺産、20世紀におけるスポーツの意味、さらには現存する社会主義国家や資本主義国家のスポーツを考えるためにも、我々は公開されつつある公文書の分析とともに、主観性や虚構性などに留意しつつ自叙伝著作や時代の証言者の声にも耳

を傾け、慎重に時間をかけて東ドイツスポーツ史研究を進めるべきではなかろうか。そして、ドイツスポーツの歴史的伝統、ソビエトスポーツの受容、東西ドイツスポーツの相互関係などからも研究成果を積み重ねたうえで、「DDRの社会主義身体文化（＝スポーツ）が、その生い立ちから不可避的に、実は「ロシア的」社会主義身体文化以外のもではなかった」⁸⁵⁾という評価についても再考していく必要があると思われる。

「本稿の要旨については、日本体育学会第58回大会で口頭発表しているが、本稿はそれを「資料」としてまとめたものである。」

註及び引用

- 1) Bernett, H., Prolegomena zur historischen Aufarbeitung des Systems von Sport und Körperkultur in der DDR., In: Stadion XVI, S.1-36, 1990.
- 2) 例えば次を参照。Forst, W. u. a., Studienmaterial zur Sportwissenschaft. Quellenauszüge zur Sportgeschichte. Teil II: 1945-1970 (DDR Sport), Braunschweig/Magdeburg, 1991.
- 3) Krüger, M., Einführung in die Geschichte der Leibeserziehung und des Sports. Teil 3: Leibesübungen im 20. Jahrhundert. Sport für alle, Schorndorf, 1994.
- 4) Spitzer, G., Teichler, H. J., Reinartz, K. (Hrsg.), Schlüsseldokumente zum DDR-Sport, Ein sporthistorischer Überblick in Originalquellen, Aachen, 1998.
- 5) シュタージ (Stasi) とは、東ドイツの秘密警察・諜報機関である国家保安省 (Ministerium für Staatssicherheit、略号: MfS) の通称である。徹底した監視態勢で東ドイツ国民を震え上がらせるばかりでなく、西ドイツにもスパイを送り込み、東西両ドイツ国民から恐れられた。東ドイツのエリートスポーツの活動もほぼすべて監視していた。
- 6) 船井廣則、「『歴史』としての東独スポーツ」、『スポーツ史研究』、第18号、43～48頁、2005.
- 7) Seifert, M., RUHM UND ELENDE DES DDR-SPORTS, Keine Bilanz-Aufgeschriebenes aus 40 Jahren eines Sportjournalisten, Berlin, 1990.
- 8) Fuchs, R., Ullrich, K., Lorbeerkrantz und Trauerflor, Aufstieg und "Untergang" des Sportwunders DDR, Berlin, 1990.
- 9) Ewald, M., Ich war der Sport. Wahrheiten und Legenden aus dem Wunderland der Sieger, Berlin, 1994.
- 10) Oertel, H. F., Höchste Zeit. Erinnerungen, Berlin, 1997.
- 11) Seyfert, G., Da muß noch was sein. Mein Leben - mehr als Pflicht und Kür, Berlin, 1998.
- 12) 新村出編、「広辞苑」、第四版、岩波書店、1991、1157頁。
- 13) Buss, W., Becker, C. (Hrsg.), Der Sport in der SBZ und frühen DDR: Genese-Strukturen-Bedingungen, Schorndorf, 2001, S.50-52.
- 14) 自伝の分析方法については、例えば次を参照。東京大学教養学部歴史学部会編、『史料学入門』、岩波書店、2006.
- 15) 唐木國彦、「『社会主義的スポーツ』の崩壊」、関春南/唐木國彦編、『スポーツは誰のためにー21世紀への展望』所収、大修館書店、1995、170～197頁。なお、わが国における現代ドイツスポーツ史研究の代表的な著作である高津勝の『現代ドイツスポーツ史研究序説』(1996)では、ソビエト占領地区、東ドイツ、ドイツ統一にかかわるスポーツ史的事実が視野の外に置かれている。また、ドイツ統合後の代表的文献である藤井政則の「スポーツの崩壊ー旧東ドイツのスポーツの悲劇ー」(1998)は、東ドイツスポーツの歪んだ民主集中制やシュタージとの関係などを明らかにし、我々に多くの示唆を与えるものであるが、

- これらの5冊の自伝的著作については触れられていない。
- 16) Walter Ulbricht (1893-1973年) は、1950年から1971年までSED 第一書記を務め、東ドイツの建国と初期の発展に中心的な役割を果たした。
- 17) Erich Honecker (1912-1994年) は、Ulbrichtの後を襲いSED 第一書記となり、東ドイツの国家崩壊寸前まで国家元首に留まった。
- 18) Seifert, a.a.O., S.45.
- 19) ebenda, S.65f.
- 20) Ewald, a.a.O., S.46f.
- 21) Oertel, a.a.O., S.165.
- 22) Ewald, a.a.O., S.41.
- 23) ベルリンの東に位置するスポーツセンターであり、低圧トレーニングルームなどの施設を備えていた。
- 24) Ewald, a.a.O., S.37.
- 25) Seifert, a.a.O., S.133f.
- 26) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.80.
- 27) Seifert, a.a.O., S.66.
- 28) Seyfert, a.a.O., S.184-215.
- 29) Seifert, a.a.O., S.155.
- 30) 東ドイツにおけるスポーツ章 (Sportleistungsabzeichen) の導入は、1950年の「青少年法」の第36条によって定められた。
- 31) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.102-116.
- 32) Seyfert, a.a.O., S.213.
- 33) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.108.
- 34) Seifert, a.a.O., S.62.
- 35) Ewald, a.a.O., S.196.
- 36) ebenda, S.33-36.
- 37) Seifert, a.a.O., S.163-181.
- 38) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.110-112.
- 39) ebenda, S.12.
- 40) Ewald, a.a.O., S.20.
- 41) Seifert, a.a.O., S.25.
- 42) Ewald, a.a.O., S.47.
- 43) ebenda, S.155.
- 44) Seifert, a.a.O., S.175.
- 45) Ewald, a.a.O., S.165-167.
- 46) ebenda, S.169-171.
- 47) ebenda, S.182.
- 48) Seyfert, a.a.O., S.73f.
- 49) Seifert, a.a.O., S.109-120.
- 50) Oertel, a.a.O., S.211-214.
- 51) Seyfert, a.a.O., S.146.
- 52) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.125.
- 53) Ewald, a.a.O., S.101-132.
- 54) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.96.
- 55) Seyfert, a.a.O., S.214.
- 56) Seifert, a.a.O., S.18.
- 57) Ewald, a.a.O., S.145-158.
- 58) 例えば次を参照。宇都宮徹彦、「ダイナモ・フットボールー国家権力とロシア・東欧のサッカー」、みすず書房、2002.
- 59) Ewald, a.a.O., S.55-60.
- 60) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.95.
- 61) Ewald, a.a.O., S.98.
- 62) ebenda, S.58f.
- 63) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.81.
- 64) ebenda, S.122.
- 65) Seyfert, a.a.O., S.180f.
- 66) Seifert, a.a.O., S.146.
- 67) ebenda, S.48-54.
- 68) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.17f.
- 69) Oertel, a.a.O., S.71-76.
- 70) Seyfert, a.a.O., S.160.
- 71) Seifert, a.a.O., S.11f.
- 72) ebenda, S.191.
- 73) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.47.
- 74) Oertel, a.a.O., S.153.
- 75) Seifert, a.a.O., S.12f.
- 76) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.64.
- 77) ebenda, S.27.
- 78) 平和自転車競走 (Friedensfahrt) の最初のレースは1948年にワルシャワ-プラハ間で開催され、1952年以後はワルシャワ、ベルリン、プラハを中心に開催された。冷戦期、このレー

スは、東側のツール・ド・フランスとして知られ、人気を博した。

- 79) Oertel, a.a.O., S.82f.
- 80) ebenda, S.161f.
- 81) Fuchs, Ullrich, a.a.O., S.137.
- 82) Ewald, a.a.O., S.228.
- 83) 次を参照。ベッテ・シマンク著、木村真知子訳、『ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点—』、不昧堂出版、2001、159頁。
- 84) 次を参照。拙稿、『G.Wonneberger 著 “Studie zur Struktur und Leitung der Sportbewegung in der SBZ/DDR (1945-1961)” (2001)の検討』、『体育史専門分科会 2005年度春の定例研究集会発表抄録集』、2005、2～3頁。
- 85) 船井廣則、『東ドイツのスポーツとはなんだったのか』、稲垣正浩・谷釜了正編、『スポーツ史講義』所収、大修館書店、1995、120～124頁。